

セミヨン・ビシュコフ 指揮

Semyon Bychkov, Music Director / Chief Conductor

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

Czech Philharmonic Orchestra

パブロ・フェランデス チェロ

Pablo Ferrández, cello

ドヴォルザーク・プログラム

Antonín Dvořák Program

序曲「オセロ」op.93

Ouverture "Othello" op.93

チェロ協奏曲 短調 op.104

Cello Concerto in b minor op.104

I. *Allegro*

II. *Adagio ma non troppo*

III. *Allegro moderato*



交響曲 第8番 ト長調 op.88

Symphony No. 8 in G major op.88

I. *Allegro con brio*

II. *Adagio*

III. *Allegretto grazioso - Molto vivace*

IV. *Allegro ma non troppo*

10/28

(土)17:00開演 愛知県芸術劇場コンサートホール

主催



CHUKYO TV

セミヨン・ビシュコフ(音楽監督・首席指揮者)

Semyon Bychkov, Music Director / Chief Conductor

1952年レニングラード(現・サンクトペテルブルグ)生まれ。1975年アメリカに移住し、1980年代半ばよりヨーロッパをベースに活躍している。2013年のチェコ・フィルとの公演に続いて、彼は同楽団と「チャイコフスキー・プロジェクト」を開始。コンサート・シリーズやスタジオ録音などを通して、チャイコフスキーの音楽を追求する喜びを共有している。同プロジェクトでは、2016年秋にデッカ・レーベルから交響曲第6番「悲愴」(カップリングは幻想序曲「ロメオとジュリエット」、1年後には「マンフレッド交響曲」)をリリース。そして2019年秋には、チャイコフスキーの交響曲全曲、3つのピアノ協奏曲、弦楽セレナード、「フランチェスカ・ダ・リミニ」などが収録されたボックスセットの発売と、それに続く同楽団のブラハ、東京、バリ、ウィーンでの公演で最高潮を迎える。

ソヴィエト連邦を離れてから14年後の1989年、彼は母国に戻り、サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団の首席客演指揮者に就任。そして同年、バリ管弦楽団の音楽監督に就任した。また、その数年前からニューヨーク・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管などの楽団で活躍し、国際的なキャリアが活発になった。1997年にはケルン放送交響楽団の首席指揮者、1998年にはドレスデン国立歌劇場の首席指揮者に就任。2018年10月、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者・音楽監督としての任期をスタートさせた。

ビシュコフは、欧米の主要オーケストラや歌劇場で指揮をしている。

チェコ・フィルのタイトルの他、BBC交響楽団の名誉称号も与えられ、BBCプロムスには毎年登場している。また王立音楽院では、チェコ・フィルと共に、2020年より教育プログラムのシリーズを立ち上げる予定。また2015年のインターナショナル・オペラ・アワードでは、「コンダクター・オブ・ザ・イヤー」に選出された。コンサートのステージにおいては、生来の音楽性と厳格なロシアの教育に拠る演奏が高く評価されている。4世紀という広範囲におよぶレパートリーを持ち、今シーズンには、チェコ・フィルとの大規模な日本ツアー(今回)やロシア、中国、スペインでの公演の他、ミュンヘン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管の本拠地とドイツでの公演や、ウィーンでのR.シュトラウス「エレクトラ」、ロンドンでのワーグナー「トリスタンとイゾルデ」などの公演が予定されている。

録音でのキャリアは1986年にフィリップスとの契約で始まり、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、フィルハーモニア管、ロンドン・フィル、そしてバリ管などと膨大かつ記念碑的なディスコグラフィを作り上げてきた。ケルン放送響との13年のコラボレーション(1997-2010)では、ブラームスの交響曲全集やR.シュトラウス、マーラー、ショスタコーヴィチ、ラフマニノフ、ヴェルディなどの作品を収録。ワーグナー「ローエングリン」の録音は、BBCミュージック・マガジンのレコード・オブ・ザ・イヤー2010に選出され、ウィーン・フィルとのシュミットの交響曲第2番の録音は、同誌の「レコード・オブ・ザ・マン」に選出された。



©Marco Borggreve

パブロ・フェランデス

Pablo Ferrández

「ポップス界のアイドルのように人を引き付ける力、素晴らしいテクニック、そして爽快な気分させる音楽性」 —ロサンゼルス・タイムズ紙
「スペインがパブロ・フェランデスという新たな天才チェリストを輩出」 —フィガロ紙

第15回チャイコフスキー国際コンクールの入賞者で、ソニー・クラシカルと専属契約を結ぶアーティストであるパブロ・フェランデスは、「新たな天才チェリスト」(フィガロ紙)と称賛されている。人の心をつかむ演奏者で、「フェランデスはソリストとしての技術、気質、精神、そして権威のすべてを合わせ持ち、表現力と魅力に富んでいる」(エル・バイス紙)
驚異的なチェリストとして、同世代の中でもっとも需要の高い器楽奏者の一人となっている。

2021年にデビュー・アルバム「リフレクションズ」をソニー・クラシカルよりリリースし、高い評価を得てオーパス・クラシック賞を受賞。2022年秋には、アンネ=ゾフィ・ムターとM.ホーネック指揮・チェコ・フィルとの共演によるブラームスの《二重協奏曲》と、ムターとランバート・オルキスとの共演によるクララ・シューマンの《ピアノ三重奏曲》を収録した2作目のアルバムをリリースし、激賞された。近年共演した主なオーケストラには、ロサンゼルス・フィルとのハリウッド・ボウル、チェコ・フィル、ミラノ・スカラ座フィルハーモニー、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団、オスロ・フィル、ソウル・フィルハーモニック、バイエルン放送響、NDRエルブフィルハーモニー、コンツェルトハウス管、トーンキェストラ管、ウィーン放送響、ロイヤル・フィルハーモニック、アカデミー室内管、イスラエル・フィル及びロッテルダム・フィルなどがある。前シーズンには、エドワード・ガードナー指揮・ロンドン・フィルとアンネ=ゾフィ・ムターとの共演でツアーを行った。ジョン・ミョンフンとミュンヘン・フィル、エリム・チャンとアントワープ・シンフォニーとも共演している。彼はまた頻繁に、ヴェルビエ、ザルツブルク、ドレスデン、シオン、ドヴォルザーク・ブラハ音楽祭、グラント・パーク、エルサレムなど、国際的に著名な音楽祭にも招かれている。

2023/24シーズンには、ニューヨークのデイヴィッド・ゲフィン・ホールでのデビューが、マドリッド交響楽団(レアル劇場管)との共演で予定されているほか、ボストン響、クリーヴランド管、サンフランシスコ響、ピッツバーグ響、シアトル響、トーンハレ管、ストラズブル・フィル、リエージュ王立フィルハーモニー管、スタヴァンゲル響、ムジークコレギウム・ヴァンタートゥーアとの共演のほか、ロッテルダム・フィル、ロンドン・フィル、ロイヤル・リヴァプール・フィル、デュッセルドルフ響、HR響、フランス国立管、そしてガリシア響を再訪予定。さらに、ロサンゼルス・フィルを再訪し、G.ドゥダメル指揮のもと、アンネ=ゾフィ・ムターとブラームス《二重協奏曲》を演奏する。また、S.ビシュコフとチェコ・フィルとともに、日本とヨーロッパでツアーを行い、ドヴォルザーク《チェロ協奏曲》を演奏予定。

1991年、スペインのマドリッドで音楽家の両親の家に生まれ、13歳で権威あるソフィア王妃高等音楽院に入学し、ナタリア・シャコフスカヤのもとで研鑽を積む。その後、ドイツのクロンベルク・アカデミーでフランス・ヘルメルソンに師事し、さらにアンネ=ゾフィ・ムター財団の奨学生となった。

使用楽器は、1689年製ストラディヴァリウス「Archinto」。寛大なストレットン協会のメンバーにより、生涯貸与されている。



©IGOR STUDIO



チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 Czech Philharmonic Orchestra



1創設124年のチェコ・フィルハーモニー管弦楽団は、1896年1月4日に有名なルドルフィヌムでの創立公演でオール・ドヴォルザーク・プログラムを演奏したが、指揮をしたのは作曲家自身であった。チェコ・フィルは、祖国の作曲家の音楽の解釈において絶対的な信頼を得ていると同時に、ブラームス、チャイコフスキー、そして1908年に自作の交響曲第7番を同楽団で自ら指揮したマーラーの音楽との深い関係性が知られている。

チェコ・フィルの誇り高き歴史は、ヨーロッパの中心に本拠地を構える地域性と、チェコ共和国の不安定な政治の歴史を反映しており、スメタナの「わが祖国」が、強力なシンボルとなっている。

1945年、首席指揮者のラファエル・クーベリックが、チェコスロヴァキアの解放に感謝を捧げる公演で同曲を指揮し、その45年後にはまた、チェコスロヴァキアの最初の自由選挙を記念する曲に選んだ。そして2019/20年シーズンには、首席指揮者兼音楽監督のセミヨン・ビシュコフが、「わが祖国」を初めてチェコ・フィルと共に演奏する。

ビシュコフとの2シーズン目には、共に取り組んでいる「チャイコフスキー・プロジェクト」が最高潮を迎え、デッカから同プロジェクトのボックス・セットが発売される他、プラハ、東京、ウィーン、パリで公演が予定されている。また同シーズン中には、台湾、ロシア、中国、スペインを訪れる他、チェコで、グラナート、ベリオ、デュティユー、マルティヌー、ブラームス、ショスタコーヴィチ、ベートーヴェン、マーラーの作品を演奏する予定。

チェコ・フィルの歴史を通じて、自国の作曲家たちの擁護と、音楽が持つ人生を変えるほどの力を信じることに、その中心を貫いている。1920年代という早期より、ヴァーツラフ・ターリヒ（1919-41年の首席指揮者）は、労働者、若者、赤十字社、チェコスロヴァキア・ソコル（運動協会）、スラヴ女性連盟などのボランティア組織のためにコンサートを行う先駆者となり、1923年にはウィーン・フィルとベルリン・フィルの楽団員を含むロシア、オーストリア、ドイツの音楽家たちのための3つの慈善公演を行った。その哲学は現在も大切に受け継がれている。総合的な教育戦略は、400を超える学校のあらゆる年代の生徒たちをルドルフィヌムに招き入れ、イダ・ケラロヴァが推進した、チェコ共和国とスロヴァキアのロマのコミュニティのための音楽と歌のプログラムは、社会から排除された家族たちに、自分たちの声をみつつける機会を提供した。さらに2020年からは、イギリスの王立音楽院や中国、南京の江蘇大劇院と交換教育シリーズを実施する。

マルティヌーとヤナーチェクの音楽の古くからの擁護者であったように、自国の著名作曲家も新人も同じように理解し広めていく活動は、チェコ・フィルの活力の源泉となっている。ビシュコフとのコラボレーションにより、9人のチェコの作曲家たちへオーケストラ作品が委嘱されると同時に、国外の5人の作曲家にも作品を委嘱し、来シーズン以降に初演されることになっている。さらに同楽団は、年一回の若い作曲家のためのコンクールを開催しているが、これは2014年に、今は亡きイルジー・ピエロフラーヴェク（首席指揮者：2012-2017年）が立ち上げたものである。



アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)は伝統的な様式のうちに母国ボヘミア(チェコ)の民謡や舞曲の特徴を取り込みながら、ボヘミアの民族的な芸術音楽を追求した。今回のチェコ・フィルの日本公演では、彼の3つの大作協奏曲と後期の3大交響曲、さらに円熟期に生み出された序曲3部作『自然と人生と愛』が取り上げられるが、いずれの曲も民族主義の精神を打ち出す一方で、それぞれが際立って個性的な特質を示している。かつてドヴォルザーク自らが指揮したチェコ・フィルは、そうした彼の音楽の民族的特色とともにその作風の広がり多様性を深い共感をもって表現してくれることだろう。この大作曲家の芸術の精髓を存分に堪能したい。

■ 序曲「オセロ」Op.93

ドヴォルザークはすでに円熟期に入っていた1891年から翌年にかけて、3曲の演奏会用序曲からなる“序曲3部作『自然と人生と愛』”を作曲した。

本日演奏される第3曲は“愛”をテーマとする**序曲「オセロ」op.93**だが、シェイクスピアの劇による題からも窺えるように嫉妬を描いた曲で、全体に劇的な緊迫感に満ち、3曲共通の“自然の主題”も本来の伸びやかさを失って、ここでは暗い性格に変容されている。序奏では祈りの気分が“嫉妬の主題”の断片によって脅かされ、主部の第1主題は“嫉妬の主題”と“自然の主題”の動機が組み合わされている。

■ チェロ協奏曲 短調 Op.104

ドヴォルザークは晩年の一時期、ニューヨークで暮らした。この時期の彼の作品には母国に対する望郷の思いを感じさせるものが多いが、特にアメリカ時代最後の1894年晩秋から翌年2月にかけて書かれたチェロ協奏曲は、そうした感情が強く現れ出ている。彼は着手前の1894年夏の休暇に一時帰国しており、そのことがアメリカに戻った後の彼の母国愛を一層強めることとなったようだ。シンフォニックともいえる壮大な響きとスケール感のうちにチェロと管弦楽の表現力をフルに発揮させた劇的な作品で、古今のチェロ協奏曲の最高峰ともいえる傑作である。

第1楽章(アレグロ)は協奏的ソナタ形式で、悲愴感を湛えた第1主題と5音音階によるノスタルジックな第2主題を軸に劇的に運ばれる。**第2楽章**(アダージョ・マ・ノン・トロppo)は憧憬と孤独な思いを綴ったような叙情的な楽章。**第3楽章**(アレグロ・モデラート)は民俗的な主題を中心に技巧的なチェロと雄弁な管弦楽が起伏に満ちた発展を繰り返すフィナーレである。ドヴォルザークのかつて恋人ヨゼフィーナ(結局その妹が妻となった)が好んだ歌曲が第2楽章中間部と第3楽章コーダに引用(後者は完成後に彼女の死を知って加筆されたもの)されているのが意味深長である。

■ 交響曲第8番 ト長調 Op.88

1889年に作曲されたこの第8番は、ドヴォルザーク自身「個性的で新しい書法による、自分のこれまでの交響曲とは異なった作品」と述べているように、自由な発想による独創的なスタイルの交響曲で、伝統的な交響曲の論理的な作法から離れ、湧き上がる楽想とラブソディックな自由な発展を生かす中で民族的な精神を表現している。構想はブラハの南西に位置する豊かな自然に囲まれた小村ヴィソカーでなされているが、まさにそうしたボヘミアの自然や生活感が感じられるような、郷土的な色合いを強烈に打ち出した作品だ。

第1楽章(アレグロ・コン・ブリオ)はソナタ形式をとるが主題や楽想が多彩で、第1主題からして冒頭短調で示される楽想と、続いてフルートが吹く牧歌的な長調の楽想という対照的な2つの楽想からなり、さらにヴィオラとチェロのコラール風の楽句、短調で出る第2主題、さらに木管が伸びやかに歌う長調の旋律などが次々出現するというように、長調と短調の揺れ動きと曲想の変化が目まぐるしい。その一方で展開部ではそうした要素が念入りに展開されるという交響曲作家らしい論理的な面も窺わせている。**第2楽章**(アダージョ)は自然の中での孤独感を感じさせる楽章だが、中間部では霧が晴れたような明るい盛り上がりを見せる。**第3楽章**(アレグレット・グラツィオーソ)はメランコリックな主題を持つ民俗舞曲風の楽章。中間部の明朗な主題は自作のオペラ「頑固者たち」からの引用。トランペットのファンファーレで始まる**第4楽章**(アレグロ・マ・ノン・トロppo)は自由な変奏形式による明快なフィナーレである。